



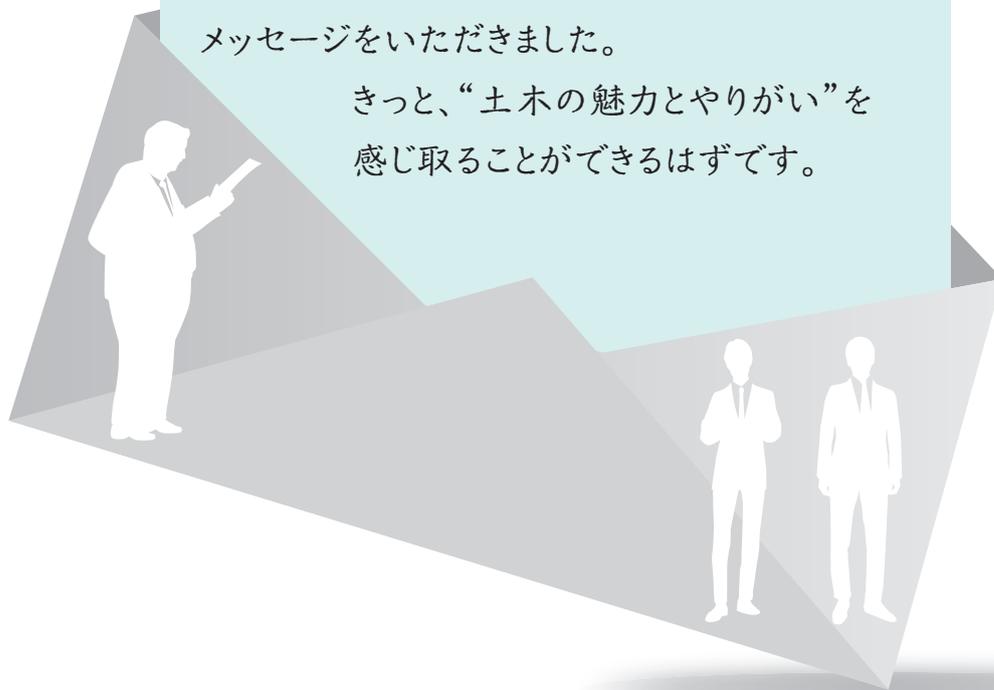
新入社員への手紙



新入社員の皆さん、入社おめでとうございます。

社会人としての新しい人生がスタートし、心配や不安もある反面、希望と期待を胸に新たな一歩を踏み出された皆さんに、さまざまな経験を積んで活躍されている先輩方から、心のこもったメッセージをいただきました。

きっと、“土木の魅力とやりがい”を感じ取ることができるはずです。



- 自分自身の責任を感じる感性を磨いてほしい 4
東急建設株式会社 首都圏土木支店 土木部 両国堅川作業所 所長 榊原 将
- 技術者としての誇り 5
三井住友建設株式会社 東京土木支店 土木部 土木グループ長 兼松 伸次
- いい時にこの業界に 6
東亜建設工業株式会社 土木事業本部 土木部長(寄稿当時) 馬場 隆之

2014.4
DOBOKU

新入社員への手紙

自分自身の責任を感じる感性を磨いてほしい

新入社員の皆様、入社おめでとうございます。

今、皆さんは社会人としてのスタートラインに立ち、将来の自分に夢や希望を感じていることと思います。20年前は私も新入社員でした。当時を思い出して皆さんにお話をさせて頂きたいと思います。

私が現場に配属されて先ず面食らったのは、建設業の朝が早いことでした。

先輩方は、遅くとも大体朝7時30分までには出社してきます。私は、先輩方が出社する前に事務所の机を拭き、ゴミ箱をきれいに片付け、床のモップ掛けをやりなさいと言われたことを思い出します。私は生来の寝坊助でしたからこれが辛くて。でも出社した先輩方から「おっ、きれいだな。榊原ありがとう。今日も頑張ろうな」と言ってもらったことを覚えています。「なんと気持ちの良い人達なのだろう。この先輩方から一生懸命学んでやろう」と思いましたね。

そのうちに仕事を少しずつ覚えて、先輩と一緒に測量をするようになりました。

ある日の夕方、事務所に戻ってきて先輩と一緒に計算をして図面を書いてみると、どうも測量を間違ったような箇所がある。すると先輩方は、「よし、現場全部の照明を付けて、もう一回測量に行くぞ!」と言うのではないですか。正直私は「こんな時間から測量をやり直したら夜9時頃までかかってしまうな、嫌だなあ」と心の中で思いながらも、「はい、わかりました」と答えて寒い中で測量したことを思い出します。

測量が完了して図面を直し終わった時、先輩が「俺たちはただ仕事をこなすだけではないよ。世のため人のために間違った物は絶対に造ってはいけない。それには時間なんて関係ないよ」と話してくれました。良い物を造るために全く妥協しない先輩方を見て感動するとともに、自分もこんな凄い人たちのようになれるのだろうかと思いを無くしたことを覚えています。

その後、コンクリートスラブ（天井）を造るた

めの仮設支保工の設計をするよう指示を受け、昔の教科書を引っ張り出して設計させてもらいましたが、その時に社会人は学生とは全く違うものと実感しました。学生時代は問題を与えられてそれを解き、先生から○か×をもらうだけ。しかし社会人は、どんな荷重がかかりどれくらいの支間長で支えどんな部材を支点に選ぶかなど、要するに、問題を作る作業も解く作業も全て自分の責任においてやらなくてはならないということです。

私が仮設支保工の設計と施工を任せられ、実際に生コンクリートを流し込む日、先輩から「お前は今日1日、支保工の下に入って自分が設計したとおりの沈下量で納まるかチェックしろ。もしお前の設計が間違っていたら支保工が崩れて、上にいる職人は全員落ちて大怪我だし、お前も無事じゃないぞ」と言われました。

その日は支保工の下で生きた心地がしなかったですね。

実際には設計通りの沈下量で全てが納まり、現在その場所は毎日電車が走るトンネルの天井になっています。今思えば、先輩たちはこっそり私の設計を確認して、これなら大丈夫だなど思いながら、私に“自分自身の責任で人の命まで預かるこの仕事の厳しさ”を教えてくれたのだと思います。

皆さんが社会人として生きて行くときに、この“自分の責任”ということ意識して、前向きに頑張っていたらいいなと思います。20年前はこんな情けなかった私も、今では数名の部下を抱える現場の所長です。今も“自分の責任”ということを常に意識して、『明るく、楽しく、前向きに』頑張っています。

これからの皆さんに幸多かれ!と祈っています。

東急建設株式会社

首都圏土木支店 土木部
両国堅川作業所

所長 榊原 将





技術者としての誇り

新入社員の皆さん、入社おめでとうございます。皆さんは、多くの夢を描き、希望を抱き、この業界に入ってこられたと思います。また、同時に多くの不安や心配があると思います。しかし、誰でも入社時は同じ思いです。その不安、心配を乗り越えながら、自ら思い描く夢を実現していくのだと思います。

私の入社は、今から24年前の平成2年で、バブル経済の真っ只中でした。最初の現場は、横浜市内の造成工事でした。測量、工事の写真撮影、資機材の注文など全てが初めての経験で、不安でいっぱいでした。はじめは、測量ミスや材料の注文ミスなど失敗もいろいろしましたが、ここで踏ん張らねばと思い、逃げずにがんばりました。ちょうど1年が経ち、その工事の発注者への引渡しのための検査がありました。無事検査に合格した時、1年間苦勞し、またがんばってきた一つひとつのことを思い出し、涙が込み上げてきたことを今でも忘れません。

その後は、いろいろな場所へ転勤もしました。海外でも仕事をしました。海外では、言葉も分からない、習慣も違うなど戸惑うことばかりでした。しかし、これまで自分自身の培ってきた経験や技術により問題点を一つひとつ解決していきました。また、共に仕事をする仲間と一緒に乗り越えていきました。その後、日本に戻り、作業所長として河川を横断する橋梁の下部工事に従事しました。この工事は、工期的に非常に厳しい工事でした。はじめて作業所長を任された工事でもあり、その重責に押しつぶされそうになりました。しかし、工事を進める中で、地元住民の方々から、早くこの橋が完成することを待ち望んでいる声を聞き、なんとしてでも予定通り完成させねばとがんばりました。結果として、予定の工期内で完成できたことは、技術者としての誇りに感じました。そういった経験があるから今の自分があり、これからもがんばっていけるのだと思います。

これから皆さんは、社会人として働くことになります。社会人として働くわけですから、会社を含めた社会に貢献していかなければなりません。皆さんの時代はどんどん社会が変化していきます。この業界で働き、社会に貢献するということは、その変化に合わせて変わる社会からの要請を技術者として実現していくことだと思います。

過去を振り返ると戦後の日本の復興期には、先ずは国民の生活基盤を早く築き上げることが求められました。そこで、先輩技術者の多くの苦勞によって、生活基盤を築くと共に、現在の土木技術の基礎を築いていただきました。その後、高度成長期からバブル期には、新幹線や高速道路などビックプロジェクトを含め多くのインフラを高度な土木技術により築き、国民の生活の向上のために大きく貢献してきました。これからの日本では、成長期から成熟期に変わろうとしています。そして、インフラの老朽化の問題、少子高齢化、原発の問題、大震災などに備えた防災など社会は様々な問題を抱えています。それらの問題に建設業界、そして、そこで働く私たちは広く関わっていかなければなりません。私たちがどのように貢献していくかがとても大切になってきます。そのためには、先輩技術者の技術をしっかりと受け継ぎ、社会に貢献することを誇りに思うことが必要です。

最後に、早い内に一級土木施工管理技士や技術士といった技術者としての資格を取得することを目指してください。勉強する過程で視野が広がり、もっと多くのことを学ぶことができます。また、資格を取得することで、自信に繋がります。

皆さんのこれからのご活躍に期待しています。

三井住友建設株式会社

東京土木支店 土木部
土木グループ長

兼松 伸次





いい時にこの業界に

建設業にこの春入社された皆さん、おめでとうございます。自由な時間が多かった学生生活から一転し、節度や責任が求められる社会人生活が始まり、戸惑いもあると思いますが「よしやってみよう」という意気込みを抱いておられることと思います。

私の新入社員時代はもう30年以上前になりますが、本社の設計部に配属され、学生時代の不勉強のつけもあり、与えられた仕事をこなすのにとにかく精一杯でした。図面であれば、自分で描いた図面がどういう経過をたどって現場にどう活かされているのか、設計計算であればどうしてこういう計算をするのかなどという根本的なことにはまったく気が回らない状態だったと記憶しています。ただ、不思議なことにそういったある意味単純な業務をひたすらこなしていくうちに次第に仕事の中身、工事におけるその業務の意味、技術面の裏付けなどがわかるようになっていきました。これは入社3年目での最初の現場での業務でも同じでした。

本来、業務というものは目的や背景など様々なことを理解してから取り組まなければいい成果など望めないものですが、ある時期は悩む前にがむしゃらに仕事をこなすというのも技術者としての成長にいいのかなと思います。

その後は、長い間、一担当者から主任、作業所長、営業所長、土木部長と、直接、間接にいろいろな立場でいろいろな工事の施工管理や現場運営に携わってきましたが、苦勞した工事が竣工した時の達成感や感動はなかなか言葉にはできないものがあります。また、出来上がったものが世の中の役に立っているのを見るとうれしくなるもので、私はふ頭や岸壁といったものに多く携わったのですが、そのような施設に多くの船舶が着いていると日本経済にも少しは貢献したかなと大げさに思ったりもします。

皆さんが入社したこの2014年は、震災復旧・復

興を確実に進めていかなければならない年、国土を強靱にしていく年、東京オリンピック・パラリンピック用施設等の準備が始まる年です。また、日本の社会・経済を支えているインフラの確実な維持の重要性が認識され、今後その需要が益々増加します。

最近、入社試験を受ける人に、なぜ建設会社を選んだのか尋ねると、様々な人と力を合わせて地図に残るような物を造ることに携わりたい、災害に強い施設を造ったり、震災復旧に貢献するなどして社会に貢献したいといった理由が多くありました。このような志を持つ皆さんですから、活躍する場面の多い、また、非常にやりがいのある時に、言い方を変えれば、まさにいい時に入社したと言えるでしょう。

現在は先ほど述べたような状況から、土木分野においては技術者不足が課題となっており、皆さん達若い世代が1日も早く土木技術者として成長し、社会に貢献してくれることが期待されています。そのためにも先輩からの指導を真摯に受け止める素直さ、同輩と切磋琢磨し、いい仕事をしたという情熱をもってこれからの業務に臨んでください。

皆さんの前途は明るいと確信します。

東亜建設工業株式会社

土木事業本部 土木部長
(寄稿当時)

馬場 隆之

